

正倉院文書写経機関関係文書編年目録

—天平勝宝元年—

新井重行

はじめに

本稿は本誌第三号より継続している、正倉院文書写経機関関係文書編年目録の第五回目にあたる。本稿で対象とするのは前号に続く、天平勝宝元年（七四九）である。本目録作成にいたった経緯や目的については、本誌第三号を参照していただきたい。

一 目録作成上の方針について

文書の編年整理にあたって問題となるのは記載内容が複数年にわたる帳簿・継文の扱いについてである。これらについては先に前号において基本的にその帳簿の開始年（帳簿にみえる最も古い記載）を作成年とする、という方針が示されている。本稿においても、この原則によつて整理をした。ただし、帳簿によつては作成日よりさかのほる情

報を記しているものがあるが、本稿では最も古い記載によつて編年し、作成日がわかるものについてはその旨を注記した。

二 凡例

- ・文書番号は原則として年月日順に付けた。
- ・文書番号には階属性を持たせている。単体の文書が集合して継文を構成している場合、その集合に文書番号を付し、各文書に枝番号を付した。また、各文書が小さな集合を構成し、いくつかの小集合によつて成り立っている帳簿の例がある。このような場合にはもつとも大きい集合に文書番号を与え、小集合には枝番号を、各文書にはさらに枝番号を付してその成立過程を表現しようと試みた。
- ・文書名の付け方については、その文書の作成目的が明確となるように心がけた。また、公式様文書の場合には発信者と書式を明示した。そのため『大日本古文書』の文書名とは必ずしも同一ではない。

- ・年月日の項には、その文書の作成年月日（帳簿の場合には開始年月日）を示した。（ ）は推定。但し文書に年月日が明示されていなくとも、年代の明らかなものにはとくに（ ）を付していないものがある。なお正月は「1」月と表記し、閏月は⑤のように示した。
- ・期間／作成の項には、作成年月日が特定できる文書には「作成」を、特定できない場合には（例えば帳簿など）その記載対象の最終年月日を「」に続けて示した。
- ・写経事業の項には、事業が推定できるものには（ ）を付して示した。空欄は事業を特定できないもの。
- ・作成または発信↓受信の項には、案文の場合にも「写経所（↓造東大寺司）」という形で想定される正文の受信者を示す。発信者が不詳でこれを推定した場合には全体を（ ）で括って示した。
- ・大日古の項には『大日本古文書』編年文書における所在を巻数と頁数のみで示した。『大日本古文書』編年文書に収録されていないものには原則として「未収」とし、ほかに活字翻刻があるものはそれを明記した。
- ・文書の所在における略号はそれぞれ、SⅡ正集、ZⅡ続修、ZKⅡ続修後集、ZBⅡ続修別集、JⅡ塵芥、ZZⅡ続々修、拾遺Ⅱ『正倉院文書拾遺』を示す。断簡番号は東京大学史料編纂所編『正倉院文書目録』（以下では『目録』と略称）に従い、それが未刊の部分はマイクロフィルムに示された紙数番号を（ ）で示した。
- ・次の項には、当該文書が一次利用であるか二次利用であるかを示した。
- ・他の利用の項には、同一の紙質上に当該文書以外に文字を書く媒体として利用されたことがある場合、それを示す。主に紙背の利用で

ある。他の利用が行われた年次は可能な限り示した。ただし、天平勝宝元年のものには年次を省略し、月日のみを示した。また、長期間にわたる帳簿のような場合に年次を省略したものがある。利用がない場合には空欄とする。

・備考の項には、上記以外に担当者の気づいた留意点などを示した。ただし、端裏書と八世紀当時および近代の編成時における題箋軸や付箋の情報は、必ず記すことにする。

三 天平勝宝元年の写経事業の概観

本稿で対象とする天平勝宝元年は、天平二十一年四月十四日に天平感宝と改元され、さらに七月二日には天平勝宝と改元されている。よって当年の文書には三つの元号が使用されているのであるが、以下の記述では煩を避けるため、特にことわらない限り当年全体を示す際には勝宝元年と記すことにする。

1 天平二十年以前からの継続事業

光明皇后発願五月一日経の書写は、天平十五年より方針が変更され、開元釈経録にない章疏なども対象に加えて書写が行われた。方針変更後の写経は、底本入手の困難さから容易には進まず、その規模はそれほど大きくはない。勝宝元年にも五月一日経の事業は引き続き行われているが、この頃までには入手の容易なものはほとんど書写し終えており、未写の底本が入手でき次第書写するという状況であった。

勝宝元年における五月一日経の書写状況がうかがえる文書はそれほど多くはない。〔〇三八〕・〔〇五四〕・〔〇七四〕などからわずかに書

写の行われていたことが知られるが、布施申請解などは存在せず、活発に活動していたとは言い難い。事実上の休止状態であり、山下有美氏の指摘の通り、事業の一応の終了とみなされていたのであろう（山下一九九九）。

天平十五年に開始された大官一切経（先写）、および天平十八年に開始された後写一切経は、いずれも天平二十年にはその書写を終えていたが、その残務処理に関わる文書がわずかに残されている。

まず、先写については、着軸などの製巻作業は勝宝元年の初めころ行われたらしく（春名一九九五）、三月まで軸の支給を受けたことが知られる（〇一五）、また年次未詳ではあるが、所在不明の経巻の検定も行われている（〇七五）。おそらくは（〇一五）に近い時期になされたものであろう。

後写については、九月までに経巻・遺紙・雑物の勘定が行われ（〇九四）、事業の総決算がなされている。

一方で間写経については、天平二十年に始められ、一時の中断ののち九月下旬から再開された千部法華経の書写が引き続き盛んに行われている。

料紙は断続的に内裏などから支給されており（〇〇一）、それにもなつて造紙作業も継続的に行われている（〇〇五）。校正の進行状況は（〇〇三）により知ることができ、布施申請も一―数カ月を単位としてなされている（〇一一）。

千部法華経の書写は勝宝元年における主要な事業と考えられ、後述する大安寺華嚴をはじめ多くの間写経が千部法華経料紙を使用していることから（〇四七）（〇七〇）、そのことがうかがえる。

また、天平二十年に開始された寺華嚴経疏の書写についてもいくつ

かの文書が残っている。造紙および書写作業は感宝元年四月末まで続いていることが確認できるが（〇二二）、四月中にはその書写を終えたらしく、同二十九日には布施申請解が作成され（〇二五）、翌三十日から布施の支給がなされている（〇二七）。注目されるのはその布施が大安寺からも支払われている点で（〇二七）に布施錢十貫について「自南寺来」と注記がある）、当時、大安寺を中心とする華嚴経学の興隆運動の高まりをうかがうことができる。

2 勝宝元年開始の写経

勝宝元年に開始された写経事業としては、まず大安寺華嚴経の書写が挙げられる。大安寺華嚴は、完成が間近であつた巨大な廬舎那仏画像の開眼供養という国家的な事業のための写経として、東大寺写経所の写経機関の一部を動員して大安寺で行われた。寺の組織を超えた国家的な統制力のもとで写経が行われた点は大安寺華嚴の最大の特徴であり、当時の華嚴信仰のなかでの大安寺の中心的な位置づけを明らかにするための重要な事業であつた（渡辺一九八五）。

具体的な書写過程については、感宝元年閏五月七日より料紙が裝潢に充てられ（〇四〇）、まず東大寺写経所において造紙がなされ、同十日から順次大安寺へ送られた（〇四四）（〇四五）。料紙には千部法華用のものも使用された（〇四七）。同月末には書写の見通しがたつたらしく、二十四日から、さきに使用した千部法華経料紙の返納がなされている（〇四八）。大安寺では八十人の写経生によつて書写がなされ、六月四日にすべての書写が終了した。続けて校正・装丁が行われ、七日にはすべての作業が終了し、検定帳が作成されている（〇四二）（〇五二）。その後大安寺華嚴に関する帳簿は東大寺写経所へ持ち

帰られ、一括して保管された〔〇六五〕。

次に、大般若経については、二月にすでに書写が終了した初百巻を除いた五〇〇巻分の用紙を校定し〔〇〇六〕、あわせて書写に必要な料物を申請している〔〇〇七〕。また、四月には千部法華経料紙より十一巻を使用したことが知られる〔〇二三〕。書写にはこれ以外にも千部法華料紙を使用していたと思われる、十一月に政所より支給された大般若経料紙の一部は造紙ののち、千部法華料として納められている〔〇九七〕。

ほかに具体的な書写過程が知られる写経として瑜伽論が挙げられる。瑜伽論は四月から書写が行われているようであるが、〔〇八五〕からは九月以降の本経の借用と返納状況が知られる。なお瑜伽論の書写は天平勝宝四年ころまで行われたようである。

勝宝元年に行われたことが確認できる間写経としては、ほかに十一面経二一巻（良弁、天平二十年十一月宣）（布施申請〔〇三三〕）、法華経一部（良弁、三月宣）・薬師経七巻（佐伯今毛人、五月宣）（布施申請〔〇二〇〕）、法華経論疏二部二十二巻（安倍綱麻呂、六月宣）大恵度経疏六巻（良弁、七月宣）（布施申請〔〇八三〕）、などが挙げられるが、その詳細については明らかにしえないものが多い。

四 個別文書の検討

〔〇〇一〕全三紙からなる。記載は天平二十年正月十日に内裏より千部法華料紙の支給を受けたことからはじまり、緒軸など雑物の受給の記録が日次式に記される。二紙途中で、天平二十年分の集計が記されているが、その後も同様の形式で感宝元年五月二十一日分まで

記載が続く。ところが、同年五月二十三日に帙紙の請求を行った記録より、記載様式が変化し、それまでの最低限の情報のみを記す方式から、文書（に近い形）を写し取る方式になる。目録には文書形式が整っている五月二十三日のものだけを帳簿に写し取られた解案として採用したが、それ以降の四件も文書の必要な情報を抜き取って記したもので、その点では同様の性格のものである。なお、二・三紙の間にはわずかに残画があり中間に欠があることをうかがわせるが、記載の日付を見る限り、それほど多くはないと考えられる。記載を訂正するために数行を抜き取ったものか。

〔〇〇二〕間写経の経ごとに紙・筆・墨などの支給をまとめた帳簿。前欠。

本帳簿は天平十七年五月二十五日「間紙充帳」の一部であるが、大日古は天平二十一年に類収しているので便宜に掲げた。この部分以前の接続は次の通り。

正集二十②裏（八一五六〇～五六四）
正集二十五④裏（八一五七三～五七五）
続修別集四十六⑤裏（二四一三五二～三五三）
続々修三七⑨（一〇）（二四一三五三）
正集二十一②裏（九一三三二～三三三）
正集二十一①裏（九一三三五）
正集二十七⑥裏（九一三三六）
正集四①裏（九一三三六～三三七）
正集四⑥裏（二一七・八～七一）

正集四④裏 (二四—四一九)
正集一⑩裏 (二四—四二〇、四二一)
(中間一行欠)
統修七⑤裏 (三—三二—三四)
正集十八③裏 (三一—四〇—一〇五)
〈〇〇一〉

〔〇〇三〕千部法華經の校帳。現在統々修五—九に付いている題籤軸は、本来は統修二②裏の右に付いていたもの。統々修五—九の十紙から十三紙には「一」「一番」などの注記がみられ、これは〔〇三七〕の番編成を反映したものと考えられる。一四紙末に「以前六十部者、番乱校也、是以番列不注入」とあり、この頃までに番編成が乱れていたことが知られる。十四・十五紙の継目には文字が僅存しており、前述のような状況をうけて、十五紙目からは新たな方式での校紙集計が行なわれたと考えられる。

〔〇〇四〕軸の返上を記録した帳簿。〔〇一七〕と表裏関係にある。ここで二月十三日までに返上された軸三千五百八十九枚は、先一切經の軸納の記録〔〇一五〕で三月十六日までの合計三千五百九十八枚に近似することからこの帳簿も先一切經関係か。

〔〇〇五〕全四紙からなる、裝潢への紙充および継上を記した帳簿。初行に「天平感宝元年五月一日始」とあるので、冒頭に記された正月二十七日の紙充の記録はこの帳簿の作成が開始された五月からさかのぼって記された情報である。記載様式は一行を上下に分け、上段に裝潢個人別の紙充日・紙数が記され、下段に継上日および受領した担当者の名が記される。これは初行の開始日記載に続けて「上

堺者注紙充日、下堺者注継上日」とある記載に対応しており、帳簿の部位の呼称や記載の方針が示されている例として注目される。

〔〇〇六〕写経に用いるべき用紙を申請した解案。事実書に「除先写了、初百卷遺五百卷料」とあるので、この写経は全六百卷のうち未写の五百卷分の料紙を申請したものと分かる。大般若經に関わるものであろう。左右は切断されている。

〔〇〇七〕〔〇一九〕〔〇二〇〕〔〇三九〕〔参考一〕〔参考二〕〔参考三〕は統々修四—五に収められている。〔〇〇七〕は大般若經書写に必要な雑物の申請を行った文書、その他はいずれも布施申請解案である。各文書の対応関係は以下の通り。

裏		表	
空		〔〇一九〕	
〔〇〇七〕		〔〇二〇〕	
〔参考三〕		〔参考一〕	
勝宝二年十一月「写経所牒案」 (一一—四二九)		〔参考二〕	
〔〇三九〕			
以下略		以下略	

各断簡には近代の整理時の付箋があり、もとは別々に伝存していたことが知られる。表裏関係についてはそれぞれの断簡が短い間隔で再利用されている点の特徴として挙げられる。二次利用面の文書の首尾が残っていることと考え合わせると、これらの文書案はもとから貼り継がれることなく保管されていた可能性がある。〔参考一〕と同文の解案として「造東寺司解案」(一一—四七七—四八二・

続々修一三―四）がある。

〔〇〇八〕は唯識論測法師疏料紙の請求をしたもので、この頃書写が開始されたと見られるが、翌日には一巻の写しを本経とともに内裏に持参するようにと指示されている〔〇〇九〕。

〔〇一一〕計五通の布施申請解からなる。〔一〇三―一〇二〕〔一〇三―一〇三〕は訂正のために差し替えた断簡であり、差し替えられた断簡がそれぞれ〔〇一二〕〔〇一三〕である。また〔一〇三〕の草案が〔〇一四〕である。

〔〇一六〕続々修五―二、四三―四五紙裏に記された、装潢の作業量に関する文書案および帳簿。内容は三部分に分けられる。四五紙裏には羽栗国足の手実案があるが全文を抹消し、「書造帳」という見出しに続けて経巻を納めた記録が四四紙裏に記されている。四三紙裏は「廿一年充一切経着緒軸事」という見出しに続けて三人分の作業記録が記される。それぞれの見出しは紙継目にかかるので、この部分の貼り継ぎは原状を留めていると考えられる。表裏とも羽栗国足に関わる文書である点が注目される。個人の手控えのようなものか。

〔〇二二〕造東大寺司から装束御斎会司への牒。内容は御斎会司に対し経巻の定数に従って覆の準備をするよう求めたもの。

〔〇二二〕寺華嚴経書写に関わる写経生等の手実を貼継いだ帳簿。続々修六―一一の一八紙以降からなる（一七紙までは〔野尻二〇〇二〕の文書番号一〇〇を参照）。一八・一九紙の間には新補白紙があり、一八・一九紙のそれぞれに付箋があることから、二断簡に分けられる。一八紙には端裏書「天平感宝元年四月手実」があり、原帳簿の始めとみてよい。また一九紙以降の内容も感宝元年四月の手

実であるから、両者は連続するものと考えられるが、一八紙の左端に合点の残面が残ることから、間にいくらかの欠があるものと思われる。この帳簿を詳細に観察すると紙継目から記載が始まるものと余白に書き込まれたものとが存在することが分かるが、これは帳簿の作成過程において、まず各個人作成の手実解を継文にし、その余白を利用してその他の人物の情報を書き写したことになる。目録には個人解を立項したが、書込があるものについては以下に示しておく。

文書番号	文書名	余白に記された人物
〔一〇二〕	若倭部益国注文	鳥取国嶋
〔一〇二―一〇二〕	小竹原乙万呂解	秦在磯・臺万呂・秦樟主
〔一〇二―一〇三〕	賀陽田主解	矢集小道・土師東人
〔一〇二―一〇四〕	茨田兄麻呂解	久米熊鷹
〔一〇二―一〇六〕	大友広国解	上毛野伊加万呂
〔一〇二―一〇八〕	若宮大淵注文	山下君足
〔一〇二―一〇九〕	春日虫麻呂注文	秦東人

〔〇二四〕もとは経巻の借用を求める奉請文案。〔一〇二〕は余白を利用して書き込まれた奉請文案。大日古では「経本出納帳」として第三紙以降と一括して釈文を掲げるが、各紙継目は新補白紙であるため、本目録では文案を転用した帳簿の断簡として掲出した。

〔〇二七〕寺華嚴の布施支給額を個人別に記したもの。初行に「自南寺求者」とあり、この銭が南寺（大安寺）から支給されていることが知られる。

〔〇二九〕続華嚴略疏刊定記第十三の書写作業上の仮の表紙を利用したもの。同一面に（秦）東人と（小治田）人公に関する布施支給額と作業量が記される。裏面は〔〇三〇〕で習書があり、続けて人別

の校正紙の記録が記される。いずれも寺華嚴に関わると考えられる。利用の前後関係は不詳であるが、装潢からの注文が写経所で帳簿に転用されたと推測しておく。

〔〇三三〕 未使用の写経料紙を検定したもの。「廿枚継」「廿三枚継」などの項目がみられることから、すでに継がれた料紙がストックされていたのであろう。

〔〇三六〕 千部法華経料紙を大安寺華嚴に使用するために西一櫃に別置した記録。現状での表文書が〔〇三七〕である。〔〇三七〕は校生の番編成を記したものであるが作成月日は未詳である。渡辺論文に榮原永遠男氏からの教示として、この番編成が天平二十一年二月末頃導入され同年六月頃まで採用された方式との指摘がある（渡辺一九八五）。これは〔〇〇三〕にみえる「一番」などの注記に依るのであろう（〔〇〇三〕参照）。目録では便宜にここに収めた。

〔〇三八〕 借出した経巻の返納に関する文書を貼継いだ帳簿。〔一〇一〕にみえる内裏から奉請した十三部百十巻の疏本は「経疏奉請帳」（十一・二七八・続々修一五―一五）にみえる疏本にあたる。題籤軸を持つが現状では二通が貼継がれているのみである。〔一〇三〕ももとの帳簿であったか。

〔〇三九〕 間写経に関する布施申請解案。始めに記された「救護身命経」には「佐伯宿称今毛人去年六月廿七日宣」による書写とあり、〔〇二〇〕などよりこれが天平二十年と知られることから、作成は勝宝元年である。また「薬師経」に注記された「今年五月卅日宣」とあるのがもっとも新しい日付であることにより作成の上限が知られる。〔〇〇三〕を参照。

〔〇四〇〕 大安寺華嚴料紙を装潢に充てたことを記す。〔〇四一〕はそ

の草案。このとき充て残された九九〇張を、のちに充てた際の注文が〔〇四六〕である。

〔〇四二〕 大安寺華嚴経の充本の記録。当文書の記載により底本として「山階本」「薬師寺大唐本」「薬師寺白紙本」「大安寺本」の四本を持ち寄って書写したことが知られる。

〔〇四三〕 この断簡はいわゆる「日名子文書」。文字は不明瞭であるが、料紙の支給に関わる帳簿の断簡であらう。内容は薬師経料紙の支給にかかわるもので同様の記載が正集四二①に存在する（天平十九年「間紙検定并使用帳」（三―三八〇））。

〔〇四四〕 大安寺華嚴用紙を東大寺写経所から大安寺へ進送した記録。

〔〇四五〕 大安寺華嚴用紙を進送した際の送り状を貼継いだ継文。〔一〇二〕〔一〇三〕も同内容のもので、もとはこの継文に貼継がれていた可能性が高い。日付の新しいものが右へ貼継がれていることから、左から〔一〇三〕〔一〇二〕〔一〇一〕の順で貼り継がれていたと思われるが、中間に欠がある可能性は否定できない。

〔〇四七〕 大安寺華嚴用紙を進送した際の送り状の控え。〔〇四五―一〇八〕に対応する。

〔〇四八〕 内容は二部分に分けられ、前半は大安寺華嚴に使用した千部法華料紙が再び返送された記録、後半（潤五月廿六日の記載以降）は大安寺華嚴用に準備されながら実際には使用されず、千部法華料に充てられた料紙の記録。

〔〇四九〕 小治田人公の手実。大日古では他の三通の手実（一一―一三紙）とともに「装潢手実帳」とするが誤り。〔〇五一〕も略式であるが大安寺華嚴に関する手実。

〔〇五〇〕 大安寺華嚴料紙の進送と派遣中の写経生への伝達事項を記

した文書。このとき進送した「麻紙六卷」は〔〇四四〕の記載と一致する。

〔〇五二〕 大安寺華嚴に使用した料紙および写経生への布施支給額を記した決算報告。〔〇六〇〕〔〇六一〕はその草案。

〔〇五五〕〔〇五六〕 一切経の貸出を櫃ごとにまとめた記録。奉請文を写し取り、返却されたものにはその旨を注記するという書式で記される。〔〇五五〕は第一櫃、〔〇五六〕は第二櫃に関する記録。大日古では「本経疏奉請帳」として十紙までを掲げるが、〔〇五五〕〔〇五六〕の間には新補白紙があり、別の断簡である。七紙以降も経巻奉請の記録であるが、作成年次は未詳。複数の櫃の情報が進次式で記されるほか、「在所不知」の経巻も記されるなど書式は異なる。別の時点での検定の結果であろう。

〔〇五七〕 奉請文、前欠。この経には誤りが多いが、指示の通り奉請するといふ内容をしるした部分のみ残る。裏は〔〇七三〕に転用されている。

〔〇六一〕は〔〇五二〕の草案。大日古は「一〇二」「一〇二」を接続させて収録する。両者は内容的には接続するがその当否は不詳。

「一〇二」は冒頭に用紙の内訳を記し、続けて紙数の合計を記す。
「一〇二」は返上紙の記載。それぞれ〔〇五二〕の合紙・返上紙記載と同文。

〔〇六二〕は返上紙の内訳記載。裏は〔〇六一—一〇二〕で〔〇五二〕の前段階の集計。

〔〇六三〕〔〇六四〕 いずれも大安寺華嚴の校帳。〔〇六四〕の記載の一部は〔〇六三〕と重なる。〔〇六四—一〇二〕と「一〇二」は接続しない。

〔〇六五〕 大安寺華嚴に関する公文を包んで保管していたと考えられる裏紙。類例として「写仁王経疏時公文裏紙」(二五—六・続々修四七—二)が存在する。

〔〇六六〕 小治田人公が、打紙の作業の際に料紙を治田石万呂の分より流用したことを記した注文。〔〇六七〕はその草案。

〔〇七〇〕 種々の写経の際に千部法華経用の料紙・軸・帙などを借用したことへの記録。

〔〇七二〕〔〇七八〕〔〇七九〕は造紙数を報告した手実。大日古は「裝潢手実帳」として一括して収録するが、それぞれの断簡に付箋がある。ただし以上の三通は同種の内容であり、時期も近接している。〔〇四九〕参照。

〔〇七三〕 間写経の経名ごとに校生および校紙数を記した帳簿。全一六紙。一紙目のみ勝宝元年にかかり、二紙目以降は勝宝三年以降にかかる。勝宝二年の記載を欠くが、貼継は原状をとどめると考えられる。

〔〇七四〕 三紙成巻、貼継は原状をとどめると思われる。一紙目とはと僧臨照による奉請文であるが、余白に案文を書込むことで経巻借用の帳簿に転用し、二紙目を貼継いで使用したもの。三紙目は奉請文をそのまま貼継いでいる。

〔〇七五〕〔〇七六〕〔〇七七〕 大日古は以上の三点を「検定経并雑物等帳」として納めるが、それぞれの間には新補白紙がある。題籤軸は〔〇七五〕に付いている。〔〇七五〕は先写一切経のうち所在が不明なもののリスト。年次未詳。〔〇七六〕は勝宝元年八月における間写経の検定の記録で納櫃状況や遺紙などを記す。〔〇七七〕は私願経書写に必要な雑物を勘定したもの。

〔〇八三〕布施申請解案。〔〇八一〕は草案。〔〇八四〕も対象期間が近似するので草案か。

〔〇八五〕瑜伽論の本経の借用・返却に関わる送り状の継文。書写に際して本経を数巻ずつ借用し、書写が終了するに従ってそれらを返却し同時に次の本経を借用するという書写の状況がよくうかがえる。第二・一一紙には余白を利用して書き込まれた案がある。

〔〇八七〕千部法華経の校帳、冒頭に「天平勝宝元年九月十日校始」とある。校生のウジ名を記し、下に校紙数を記す。脇に「十」と記されるのは、十月分を示すか。

〔〇八九〕大品経疏・涅槃経義記・華嚴経疏の充本帳。書写過程がうかがえる。

〔〇九〇〕余白を利用して案を書込み、転用した帳簿の断簡。

〔〇九二〕〔〇九三〕〔〇九四〕大日古では以上の三点を「後一切経用度勘定帳案」として掲げるが、それぞれの断簡には付箋がある。勝宝元年九月の用度勘定結果を報告したもの。〔〇九二〕〔〇九三〕は〔〇九四—〇一〕の草案。〔〇九三〕の裏には大小乗経律の内訳を記す。さらに前段階の草案か。〔〇九四〕は二紙からなる。貼継は原状。「後勘一切用文」の端裏を持つ。〔一〇二〕は軸・帙などの勘定。余白に受緒などの記録を記す。

〔〇九八〕内匠寮の移により牙占を送付したことを記す。牙占について「皇后宮一切経遣」とあり、山下氏は五月一日経の書写事業が終了したとみなされていたとする（山下一九九九）。

〔一一〇〕写経紙の継上の記録。勝宝元年にかかるのは初行のみ。前欠のため内容は不明。

〔一二四〕〔一二五〕は勝宝元年のものではないと思われる。いずれも

裏面の帳簿に関わる記載であろう。大日古が勝宝元年に類収しているので便宜にここに立項した。

〔参考四〕天平十八年から続く帳簿の一部であるが、大日古で勝宝元年に収めているので、参考のために掲げた。

〔参考五〕大安寺での廬舎那仏画像の作成に関わる文書。写経事業とは直接関係しないが、参考のために掲げた。

おわりに

以上、天平勝宝元年の写経所文書の概要を述べた。目録に掲げた点数からは、文書数はそれほど多くない印象を受けるが、これは前号で野尻氏も述べているように、写経業務の管理がシステム化し帳簿作成方法が整ってきたために、複数年にわたる長大な帳簿が作成されるようになったことも関係している。実際に天平末年から始まる帳簿の数は非常に多く、勝宝元年の写経事業の全体像を知るうえで、これらも参照することが必要であることを最後にお断りしておきたい。

また、凡例にも記したように、目録番号に階層性を持たせることで作成過程を表現するよう務めたが、正文を継文にしたうえでさらに余白を利用する例など、記号化にあたって苦労したものも多い。すべて今後の課題としたい。

作成または発信→受信	大日古	文書の所在	次	他の利用	備 考
写経所	3-216~220 + 10-649~650	ZZ5-6<1>~ <3>	1		3紙に付箋「一ノ八」、 右軸、実際に作成され たのは天平感宝元年五 月から
写経所(→造東大寺司)	10-649	ZZ5-6<3>	1		
写経所	10-554~555 + 651~652 + 556~588	ZZ34-6<1>~ <2> + S42②裏 + ZZ34-6<3>~ <25>	1・2		
写経所	10-554~555	ZZ34-6<1>~ <2>	1・2	1紙裏「未」(未収)、2紙 裏「奉請注文案」(9- 641)	
写経所	10-651~652	S42②裏	2	天平9年豊後国正税帳 (2-51~52)	
写経所	10-556~588	ZZ34-6<3>~ <25>	1・2	*注	3紙に付箋 「写二」「十九ノ一」
写経所	3-31・52~55 + 10-487~ 539	Z2②裏 + ZZ5- 9<1>~<35>	1・2		
写経所	3-31・52~55	Z2②裏	2	大宝2「御野国加毛郡 半布里戸籍」(1-57~ 61)	本来(003-02)の題籤軸 はこの断簡の右に付い ていたもの
写経所	10-487~508	ZZ5-9<1>~ <14>	1		題籤軸「校帳千部」(この 軸は整理の際に付けら れたもの)
写経所	10-508~539	ZZ5-9<15>~ <35>	1・2	15紙裏 <058> 23紙裏「充紙注文」 (25-12)	
装演所→写経所	24-562	ZZ37-9<16>	1	<017>	付箋「十三」「廿五ノ九」
写経所	10-643~648	ZZ28-11<1>~ <4>	1		1紙目に付箋「収鴨書 手」あり、作成は五月
写経所(→造東大寺司)	3-195~196	ZB30③	1		
写経所(→造東大寺司→ 皇后宮職カ)	10-540~543	ZZ41-5<5>~ <4>裏	1	<020>	前欠
写経所(→造東大寺司)	3-199~200	ZZ42-4<15>	1		
市原王→写経所	24-563	ZZ34-1<13>裏	1	天平16「以受筆墨写紙 并更請帳」のうち天平 21「写経絵所解案」 (8-473~474)	
装演所→写経所	3-200~201	ZB30④	1		

紙裏「未善文公岡大津十九」(10-573)、19紙裏「二月十四日充継紙十三卷 <十一巻波和良/二巻白紙>」(10-575)

目 録

天平勝宝元年 (749)

番号1	番号2	文 書 名	年	月	日	期間/作成	写経事業	文書機能
001		千部料紙并緒軸帙雑物納帳	天平20	1	10	～天平勝宝2.3.2	千部法華経	料紙緒軸雑物納帳
	01	写書所解案	天平感宝元	5	23	作成	千部法華経	帙紙請求
002		間経紙筆墨充帳	天平20	10	8	～天平勝宝7.6	間写経	紙筆墨充帳
	01	間経紙充帳	天平20	10	8	～天平感宝元.4.27	間写経	紙充帳
	02	間経紙充帳	天平感宝元	5	30	～同7.27	間写経	紙充帳
	03	間経紙筆墨充帳	天平感宝元	6	20	～天平勝宝7.6	間写経	紙筆墨充帳
003		千部法華経校帳	天平20	2	24	～天平勝宝3.5.29	千部法華経	校帳
	01	千部法華経校帳	天平20	2	24	～同.4.6	千部法華経	校帳
	02	千部法華経校帳	天平20	11	13	～21.4頃力	千部法華経	校帳
	03	千部法華経校帳	天平勝宝元	7	5	～天平勝宝3.5.29	千部法華経	校帳
004		返上軸注文	天平21	1	14	～同2.13	先写力	返上軸注文
005		千部法華経裝潢充紙並継上帳	天平21	1	27	～天平勝宝3.5.12	千部法華経	充紙・継上帳
006		写書所解案	天平21	2	4	作成	(大般若経)	用紙校定文
007		造東大寺司解案	天平21	2	15	作成	大般若経	雑物申請
008		写疏所解案	天平21	2	24	作成	唯識論疏	用紙申請
009		市原王書状	天平21	2	25	作成	唯識論疏	(奉請を指示)
010		裝潢所解	天平21	2	26	作成		布施申請

*) 4紙裏「破紙注文案」(24-411)、11紙裏「造東寺司奉請文」(12-385-386)、14紙裏「八/六十張」(10-566)、18

写経所(→造東大寺司)	3-202~214・ 263~271・274 ~280・336~ 343	ZK12(4)~(11)	1		
写経所(→造東大寺司)	3-202~207	ZK12(4)	1		
写経所(→造東大寺司)	3-208~214	ZK12(5)	1		端裏「大市首大山」
写経所(→造東大寺司)	3-263~264	ZK12(6)	1		
写経所(→造東大寺司)	3-264~270	ZK12(7)	1		
写経所(→造東大寺司)	3-270~271	ZK12(8)	1		
写経所(→造東大寺司)	3-274~280	ZK12(9)	1		
写経所(→造東大寺司)	3-280	ZK12(10)	1		
写経所(→造東大寺司)	3-336~343	ZK12(11)	1		右端に書込「廿一年八月 以写了四百廿五部十二 月書写合五百七十部」あ り(未収)
写経所(→造東大寺司)	12-35	ZZ42-1<11>	1		前 後 欠、<011-03-01> と差替えられたもの
写経所(→造東大寺司)	3-262~263	S44⑩	1		前 欠、<011-03-03>と 差替えられたもの
写経所(→造東大寺司)	12-31~33	ZZ5-4<15>	1		付 箋「廿 九 ノ 二」「四」 <010-03>の草案
写経所	10-552~553	ZZ2-3<1>	1		往来軸「軸納帳/先一切」 付箋「廿一帙三卷」
写経所	10-625~626	ZZ5-2<45>~ <43>裏	1・2	天平20「千部法華経經 師等手実帳」(10-231 ~232)	
羽栗国足→写経所	10-625	ZZ5-2<45>裏	1		全文抹消・習書あり
写経所	10-625~626	ZZ5-2<44>裏	2		
写経所	10-626	ZZ5-2<43>裏	2		
装潢所→写経所	24-585	ZZ37-9<16>裏	2	<004>	
造東大寺司(→皇后宮職 力)	10-612~614	ZZ6-1<90>裏	1	天平20「寺華嚴疏納并 充装潢帳」(10-107)	
写経所(→造東大寺司)	10-588~592	ZZ41-5<1>~ <3>	1		3紙に付箋「廿一帙二 卷」
写経所(→造東大寺司)	10-592~597	ZZ41-5<4>~ <5>	2	<007>	端裏「布施可申送案」 4紙に付箋「二」「廿一ノ 十」
造東大寺司(→装束御斎 会司)	3-215	ZB6①	1		
写経所	10-615~625	ZZ6-11<18>~ <36>	1		

011		写経所布施文案	天平21	2	27	～天平勝宝.12.14	千部法華經	布施申請
	01	写経所解案	天平21	2	27	作成	千部法華經	布施申請
	02	写書所解案	天平21	3	29	作成	千部法華經	布施申請
	03-01	写書所解案	(天平勝宝元)	(7)	(6)	(作成)	千部法華經	布施申請
	03-02	写書所解案	(天平勝宝元)	(7)	(6)	(作成)	千部法華經	布施申請
	03-03	写書所解案	天平感宝元(??)	7	6	作成	千部法華經	布施申請
	04-01	写書所解案	(天平勝宝元)	(8)	(30)	(作成)	千部法華經	布施申請
	04-02	写書所解案	天平勝宝元	8	30	作成	千部法華經	布施申請
	05	写書所解案	天平勝宝元	12	14	作成	千部法華經	布施申請
012		写書所解案	天平勝宝元	7	5頃	作成	千部法華經	布施申請
013		写書所解案	天平感宝元(??)	7	5	作成	千部法華經	布施申請
014		写書所解案	天平勝宝元	7	5頃	作成	千部法華經	布施申請
015		先一切経軸納帳	天平21	2	29	～同3.16	先写	軸納帳
016		装演注文案帳	天平20			～天平21.4頃	五月一日経	書造帳・行事報告
	01	羽栗国足手実	天平21	2	3	作成	五月一日経	手実
	02	書造帳	天平20			～天平21.4以前	五月一日経	書造帳
	03	着緒軸注文	天平21	4以前		作成	五月一日経	行事報告
017		着出軸注文	天平21	3	2	～同3.23		着出軸注文
018		造東大寺司解案	天平21	3以前		作成	間写経	布施申請
019		東大寺写一切経所解案	天平21	3頃		作成	間写経	布施申請
020		東大寺写一切経所解案	天平21	3	20以降	作成	間写経	布施申請
021		造東大寺司牒案	天平21	4	10	作成		(覆の申請)
022		華嚴経疏疏師装演手実帳	天平感宝元	4	20頃	～同4.末	寺華嚴経疏	手実帳

若倭部益国→写経所	10-615	ZZ6-11(18)	1		端裏「天平感宝元年四月 手実寺」(10-615) 付箋「二」「第八帙第三卷」
写経所	10-615~625	ZZ6-11(19)~ (36)	1		
小竹原乙万呂→写経所	10-615	ZZ6-11(19)	1		付箋「十ノ六」「三」
民屯万呂→写経所	10-616	ZZ6-11(20)	1		
賀陽田主→写経所	10-617	ZZ6-11(21)	2	「校正注文」 (19-550)	
茨田兄麻呂→写経所	10-618	ZZ6-11(22)	1		
山部針間麻呂→写経所	10-619	ZZ6-11(23)	1		
大友広国→写経所	10-620	ZZ6-11(24)~ (27)	1		
辛鍛冶広浜→写経所	10-621	ZZ6-11(28)	1		
若宮大淵→写経所	10-622	ZZ6-11(29)	1		
小治田人公→写経所	10-622	ZZ6-11(30)	1		端裏「小治田」(10-622)
春日虫麻呂→写経所	10-623	ZZ6-11(31)	1	「造紙注文」(10-624)	31・32紙の紙背は一連のもの
治田石麻呂→写経所	10-624	ZZ6-11(32)	1	「造紙注文」(10-624)	
文部曾祢万呂→写経所	10-624	ZZ6-11(33)・ (34)	1		
爪工五百足→写経所	10-625	ZZ6-11(35)・ (36)	1		
他田水主→写経所	24-586	ZZ37-9(21)	1		
写経所	10-627	ZZ16-6(2)	1		文書を転用した帳簿の断簡
写経所→寺家	10-627	ZZ16-6(2)	1		
写経所(→寺家カ)	10-627	ZZ16-6(2)	1		余白書込
写経所→造東大寺司	10-631~635	ZZ6-13(1)~ (3)	1		1紙に付箋「卅二ノ十二」端裏書「寺 天平感宝元年四月布施案文」(10-631)
写経所→造東大寺司	10-635~637	ZZ6-13(5)	1	「請紙筆墨注文」(10-637)	付箋「左」「卅七ノ一」
写経所	10-637~640	ZZ6-1(88)~ (85)裏	1	天平20「寺華嚴疏納并充裝潢帳」(10-105~107)	
写経所(→造東大寺司)	24-586~587	ZZ27-4(28)	1		付箋「十三」「卅一ノ十」

	01	若倭部益国注文	天平感 宝元	(4)		作成	寺華嚴經疏	手実
	02	華嚴經疏疏師裝潢手実帳	天平感 宝元	4		～同. 4. 27	寺華嚴經疏	手実帳
	02-01	小竹原乙万呂解	天平感 宝元	(4)		作成	寺華嚴經疏	手実
	02-02	民屯万呂解	天平感 宝元	4	20	作成	寺華嚴經疏	手実
	02-03	賀陽田主解	天平感 宝元	4	26	作成	寺華嚴經疏	手実
	02-04	茨田兄麻呂解	天平21	4	13	作成	寺華嚴經疏	手実
	02-05	山部針間麻呂解	天平感 宝元	(4)	25	作成	寺華嚴經疏	手実
	02-06	大友広国解	天平感 宝元	(4)		作成	寺華嚴經疏	手実
	02-07	辛鍛冶広浜解	天平感 宝元	4	17	作成	寺華嚴經疏	手実
	02-08	若宮大淵注文	天平感 宝元	(4)		作成	寺華嚴經疏	手実
	02-09	小治田人公注文	天平感 宝元	4	25	作成	寺華嚴經疏	手実
	02-10	春日虫麻呂注文	天平感 宝元	4	26	作成	寺華嚴經疏	手実
	02-11	治田石麻呂解	天平感 宝元	4	27	作成	寺華嚴經疏	手実
	02-12	文部曾祢万呂解	天平感 宝元	(4)		作成	寺華嚴經疏	手実
	02-13	爪工五百足注文	天平感 宝元	4	27	作成	寺華嚴經疏	手実
023		法華料紙般若便用注文	(天平感 宝元)	4	21	作成	(大般若經)	料紙便用注文
024		經本出納帳	天平感 宝元	4	28	～同. 5. 1	五月一日經・後写	經本出納帳
	01	奉請注文案	天平感 宝元	4	28	作成	五月一日經・後写	奉請文
	02	奉請注文案	天平感 宝元	5	1	作成	五月一日經・後写	奉請文
025		華嚴經疏布施案	天平感 宝元	4	29	作成	寺華嚴經疏	布施申請
026		華嚴經疏布施案	天平感 宝元	(4)		作成	寺華嚴經疏	布施申請
027		華嚴經疏經師等布施充帳	天平感 宝元	4	30	作成	寺華嚴經疏	布施充帳
028		写書所上紙注文	天平感 宝元	4	30	作成		上紙注文

装演所→写経所	24-587~588	ZZ37-9<57>裏	1カ	仮表紙を再利用(同一面に校正注文あり)、表は<030>	
写経所	24-608~610	ZZ37-9<57>	2カ	<029>	習書あり
写経所	24-589~590	ZZ27-4<49>	2	経文の習書あり(未収)	付箋「卅一ノ十」「廿六」
装演所→写経所	24-590~591	ZZ27-4<30>	1		付箋「十五」「卅一ノ一」
写経所(→造東大寺司)	24-591~592	ZZ41-5<18>	1		
装演所→写経所	24-592~594	ZZ27-4<27>	1		付箋「十二」「四十一ノ十九」
写経所→東大寺	24-594	ZZ16-4<10>	1		付箋「八枚ノ内/廿五ノ九」
写経所	10-650~651	Z28⑨裏	2	<038>天地逆	
写経所	24-607~608	Z28⑨	1	<037>天地逆	堂裏の清掃のための番編成
写経所	3-220~221・487	ZZ15-10<1>・<2>	1		題籤軸「返抄帳」、右軸
平撰・性泰→写経所	3-220~221	ZZ15-10<1>	1		
深道→写経所	3-487	ZZ15-10<2>	1		
山階寺專経所→写経所	3-590~591	Z42⑨	1		裏「道国国/東大寺/巻巻珠珠/造東寺司/珠珠/珠珠/珠珠」(未収)
写経所(→造東大寺司)	10-609~612	ZZ41-5<13>~<11>裏	1	<参考2>	端裏「東大寺写一切経所解申請経師等布施事」
写経所	3-223	Z42④	1		端裏「燕薬師経」(未収)
写経所	24-595	ZZ6-10<2>	2	<052>	付箋「二」「廿二」「三」
大安寺写経所	3-223~237	ZB39	1		
写経所	24-594~595	『拾遺』55裏	2	「造菩薩願文断簡」(『拾遺』55)	
写経所	10-657~658	ZZ6-12<2>	1		付箋「一」「廿帙五巻」
大安寺写経所	10-652~657 + 3-239~340 + 24-598~599	ZZ28-10<1>~<9> + S44⑧ + ZZ27-4<31>	1		題箋「経紙継文」「潤五月十日始」
大安寺写経所	10-652~657	ZZ28-10<1>~<9>	1		
東大寺装演所→大安寺写経所	10-653	ZZ28-10<1>	1		付箋「四十二ノ一」
東大寺装演所→大安寺写経所	10-653	ZZ28-10<2>	1		

029		華嚴經裝潢布施注文	天平感 宝元	(4)		作成	寺華嚴經疏	造紙注文
030		華嚴經疏校帳	天平感 宝元	4頃		作成	寺華嚴經疏	校帳
031		華嚴經疏裝潢布施注文	天平感 宝元	4頃		作成	寺華嚴經疏	造紙注文
032		裝潢遺紙檢校注文	天平感 宝元	5	7	作成		檢校注文
033		写書所解案	天平感 宝元	5	11	作成	十一面經	布施申請
034		裝潢所上紙注文	天平感 宝元	5	19	作成		上紙注文
035		十部法華經奉請注文	天平感 宝元	5	22	作成	十部法華經	奉請文
036		千部法華經用紙櫃納帳	天平感 宝元	(5)	27	～同6.30	大安寺華嚴	用紙櫃納帳
037		千部法華經校生職掌注文	天平感 宝元				千部法華經	(堂の清掃の番 編成)
038		經等返抄帳	天平感 宝元	5	22	～天平勝 宝3.2.5	五月一日經	返抄帳
	01	平撰・性泰牒	天平感 宝元	5	23	作成	五月一日經	經卷返納文
	02	深道解	天平勝 宝3	2	5	作成	五月一日經	經卷受領文
	03	山階寺專經所牒	天平勝 宝4	11	26	作成	五月一日經	
039		東大寺写一切經所解案	天平感 宝元	5	30以 降	作成	間写經	布施申請
040		大安寺華嚴料紙充裝潢注文	天平感 宝元	⑤	7	作成	大安寺華嚴	料紙充裝潢注 文
041		大安寺華嚴料紙充裝潢注文	天平感 宝元	⑤	7頃	作成	大安寺華嚴	料紙充裝潢注 文
042		大安寺華嚴充本帳	天平感 宝元	⑤	10	～同⑤.29	大安寺華嚴	充本帳
043		經疏充紙帳	未詳				藥師經	充紙帳
044		進送大安寺華嚴紙帳	天平感 宝元	⑤	10	～同6.4	大安寺華嚴	料紙進送帳
045		料紙進送文帳	天平感 宝元	⑤	10	～同⑤.21	大安寺華嚴	料紙進送帳
	01	料紙進送文繼文	天平感 宝元	⑤	10	～同⑤.16	大安寺華嚴	料紙進送帳
	01-01	料紙進送文	天平感 宝元	⑤	16	作成	大安寺華嚴	料紙進送文
	01-02	料紙進送文	天平感 宝元	⑤	15	作成	大安寺華嚴	料紙進送文

東大寺装潢所→大安寺写経所	10-653	ZZ28-10<3>	1		
東大寺装潢所→大安寺写経所	10-654	ZZ28-10<4>	1		
東大寺装潢所→大安寺写経所	10-654	ZZ28-10<5>	1		
東大寺装潢所→大安寺写経所	10-654~655	ZZ28-10<6>	1		
東大寺装潢所→大安寺写経所	10-655~656	ZZ28-10<7>	1		
東大寺装潢所→大安寺写経所	10-656	ZZ28-10<8>	1		
東大寺装潢所→大安寺写経所	10-656~657	ZZ28-10<9>	1	封痕あり	
東大寺装潢所→大安寺写経所	3-239~340	S44⑧	1		
東大寺装潢所→大安寺写経所	24-598~599	ZZ27-4<31>	1		付箋「十六」「卅一ノ九」
大安寺写経所	24-597~598	ZZ27-4<29>	1		端裏「充」(24-597)付箋「十四」「廿帙七巻」
写経所→大安寺写経所	24-596~597	ZZ37-9<17>~<20>	1		端裏「千部紙散書」付箋「廿九帙ノ内/廿五ノ九」「十四上」
写経所	10-658	ZZ5-4<14>裏	2	「千部法華経布施帳」(12-29~31)	
小治田人公→大安寺写経所	10-659~660	ZZ27-3<10>	2	「校正注文」(19-552)	付箋「十」「十九ノ六」
写経所→大安寺華嚴院	10-662	ZZ44-10<37>	1		付箋「卅二」「卅二ノ三」、封痕あり
秦東人→大安寺写経所	24-596	ZZ6-10<2>裏	1	<041>	
大安寺写経所	3-249~259	ZZ24-1<2>~<6>	1	2紙端裏に墨痕(封痕カ)	1紙は表裏空、1紙に付箋「卅ノ十二」
写経所→東大寺カ	10-663	ZZ37-4<11>裏	1	天平19「間紙検定并便用帳」(11-156~169)	
写経所	3-353~354 + 3-542~543・414 + 3-543~557	ZK38(1)~(6) + ZK42④	1・2		
写経所	3-353~354	ZK38(1)	1		左端ハガシトリ痕あり、中間欠か、貼継は現状
写経所	未収	ZK43[7]	1		<055-01>の断片、『目録』を参照
写経所	3-542~543・414	ZK38(2)	1		

	01-03	料紙進送文	天平感 宝元	⑤	15	作成	大安寺華嚴	料紙進送文
	01-04	料紙進送文	天平感 宝元	⑤	15	作成	大安寺華嚴	料紙進送文
	01-05	料紙進送文	天平感 宝元	⑤	14	作成	大安寺華嚴	料紙進送文
	01-06	料紙進送文	天平感 宝元	⑤	13	作成	大安寺華嚴	料紙進送文
	01-07	料紙進送文	天平感 宝元	⑤	12	作成	大安寺華嚴	料紙進送文
	01-08	料紙進送文	天平感 宝元	⑤	12	作成	大安寺華嚴	料紙進送文
	01-09	料紙進送文	天平感 宝元	⑤	10	作成	大安寺華嚴	料紙進送文
	02	料紙進送文	天平感 宝元	⑤	18	作成	大安寺華嚴	料紙進送文
	03	料紙進送文	天平感 宝元	⑤	21	作成	大安寺華嚴	料紙進送文
046		大安寺華嚴料紙充裝潢注文	天平感 宝元	⑤	13	作成	大安寺華嚴	料紙充裝潢文
047		千部法華經用紙散書	天平感 宝元	⑤	13	作成	大安寺華嚴	料紙進送文
048		大安寺華嚴料紙返納帳	天平感 宝元	⑤	24	～同7.7	大安寺華嚴	料紙返納帳
049		小治田人公解	天平感 宝元	⑤	26	作成	大安寺華嚴	手実
050		造東大寺司写經所牒	天平感 宝元	⑤	28	作成	大安寺華嚴	料紙進送・大安 寺へ派遣中の 写經生への伝 達事項
051		秦東人手実	天平感 宝元	(⑤)		作成	大安寺華嚴	手実
052		大安寺華嚴検定帳	天平感 宝元	6	7	作成	大安寺華嚴	検定帳
053		華嚴經奉請注文	天平感 宝元	6	8頃	作成	華嚴經	奉請注文
054		經疏出納帳	天平感 宝元	6	20	～天平勝 宝4.4.1	五月一日經	經卷出納帳
	01	經疏出納帳	天平勝 宝元(77)	6	20	～?	五月一日經	經卷出納帳
	01-01	經疏出納帳断片(第11・15・16紙 片)	天平勝 宝元				五月一日經	經卷出納帳
	02	經疏出納帳	天平勝 宝2	8	9	～3.1.27	五月一日經	經卷出納帳

写経所	3-543~544	ZK38(3)	2	勝宝2「写書所解案」(3-425)	
写経所	3-544~547	ZK38(4)	2	勝宝2「写書所解案」(3-423~424)	
写経所	3-547~548	ZK38(5)	2	「某状礼紙」右端に封痕(未収)	
写経所	3-548~555	ZK38(6)	1		
写経所	3-556~557	ZK42④	1		
写経所	11-9~10	ZZ15-2<1>~<2>	1		
写経所	11-10~12	ZZ15-2<3>~<6>	1		
写経所(→?)	10-663	ZZ26-7<2>裏	1	<073>	前欠
秦姓弟兄→写経所	10-664	ZZ5-9<15>裏	1	<003-03>	
安朗→写経所	10-664	ZZ3-8<6>	1	年次未詳「軸進上文」(14-329~330)	前欠、「僧安朗啓」の面の左端に「一千二百五十九人仙史生調 神今年」(未収)
大安寺写経所	11-106	『拾遺』42裏	2	「経師試字」(『拾遺』42)	
大安寺写経所	24-599~601	Z29①裏+ZZ37-9<36>裏	2		
大安寺写経所	24-599~600	Z29①裏	2	「大安寺造仏所解」(参考5)	
大安寺写経所	24-600~601	ZZ37-9<36>裏	2	<062>	
大安寺写経所	24-601~602	ZZ37-9<36>	1	<061-02>	付箋「廿八」「卅一ノ六」
大安寺写経所	11-102~104	『拾遺』44裏	2	「経師試字」(『拾遺』44)	後欠か
大安寺写経所	11-105	『拾遺』44裏	2	「経師試字」(『拾遺』44)	
大安寺写経所	11-105	『拾遺』44裏	2	「経師試字」(『拾遺』44)	
大安寺写経所	11-105	『拾遺』44裏	2	「経師試字」(『拾遺』44)	
大安寺写経所	24-597	ZZ47-2<7>	1		
常世馬人(→写経所)	3-262	S44⑨	1		
常世馬人(→写経所)	24-610	ZZ27-4<59>	1		付箋「廿九ノ十三」<066>の草案
装演所→写経所	11-1	ZZ27-4<32>	1		付箋「十七」「廿九ノ十三」

	03	経疏出納帳	天平勝宝3	2	6	～同2.25	五月一日経	経卷出納帳
	04	経疏出納帳	天平勝宝3	2	25	～同.4.13	五月一日経	経卷出納帳
	05	経疏出納帳	天平勝宝3	4	16	～4.4.2	五月一日経	経卷出納帳
	06	経疏出納帳	天平勝宝3	3	26	～4.③.29	五月一日経	経卷出納帳
	07	経疏出納帳	天平勝宝3	9	2	～4.4.3	五月一日経	経卷出納帳
055		本経疏奉請并検定帳	天平21	3	17	～天平勝宝2.8.16	五月一日経	奉請・検定帳
056		本経疏奉請并検定帳	天平感宝元	6	24	～天平勝宝2.8.9	五月一日経	奉請・検定帳
057		写経検納奉請注文案	天平感宝元	6	24	作成		奉請文
058		秦姓弟兄解	天平感宝元	6	27	作成		不参解
059		僧安朗啓	天平感宝元	6	29	作成		物品進上文
060		大安寺華嚴検定注文案	天平感宝元	(6)		作成	大安寺華嚴	検定帳
061		大安寺華嚴検定注文案	天平感宝元	(6)		作成	大安寺華嚴	検定帳
	01	大安寺華嚴検定注文案	天平感宝元	(6)		作成	大安寺華嚴	検定帳
	02	大安寺華嚴検定注文案	天平感宝元	(6)		作成	大安寺華嚴	検定帳
062		料紙返上注文	天平感宝元	(6)		作成	大安寺華嚴	料紙進送文
063		大安寺華嚴校帳	天平感宝元	6頃		作成	大安寺華嚴	校帳
064		大安寺華嚴校帳	天平感宝元	6頃		作成	大安寺華嚴	校帳
	01	大安寺華嚴校帳	天平感宝元	6頃		作成	大安寺華嚴	校帳
	02	大安寺華嚴校帳	天平感宝元	6頃		作成	大安寺華嚴	校帳
065		大安寺写華嚴時公文裏紙	天平感宝元	6頃		作成	大安寺華嚴	公文裏紙
066		装潢造紙注文案	天平感宝元(77)	7	3	作成		造紙注文
067		装潢造紙注文案	天平勝宝元	7	3頃	作成		造紙注文
068		装潢所失紙注文	天平勝宝元	7	6	作成		失紙注文

写経所	11-1~2	ZZ37-9<22>	2	同一面に校正注文あり(天地逆)、紙背左端に文字半存「妙法蓮華経巻□□」	付箋「十四下」「廿三帙二巻」
写経所	11-3~9	ZZ44-1<1>~<4>	1		4紙に付箋「四十二ノ廿三」
大納言藤原家→造東大寺司	3-273	S44⑬	1		
丈部曾祢万呂→写経所	10-660	ZZ27-3<11>	1		付箋「十一」「廿四帙十二巻」
写経所	11-16~39	ZZ26-7<1>~<16>	1・2	<057>・年次未詳校帳(11-39)・天平勝宝5年「料紙注文」(13-23~28)	16紙に付箋「五ノ十三」
写経所	11-40~42	ZZ15-7<1>~<3>	1		題籤軸「請処々疏本帳」・三紙成巻
臨照→写経所	11-40	ZZ15-7<1>	1		
写経所	11-40~42	ZZ15-7<1>~<2>	1		余白を利用して帳簿に転用
厳智→写経所	11-42	ZZ15-7<3>	1		
写経所	11-42~43	ZZ14-8<1>	1		題籤軸「検定経并雑物等帳私経計帳」(表)「検定経并雑物等帳」
写経所	11-43~48	ZZ14-8<2>~<5>	1		端裏「疏所概納/元年八月十九日検定文案」
写経所	11-48~49	ZZ14-8<6>	1		端裏「私願経勘帳」
能登忍人→写経所	10-661	ZZ27-3<12>	1		付箋「十二」「廿八ノ十」
久米家足→写経所	10-661~662	ZZ27-3<13>~<14>	2	右に貼継「写経校正注文」(19-553)	付箋「十三」「十三帙三巻」
写経所	11-68~69	ZZ28-12<1>	2	<081>	往来軸「常疏并間疏/等用緒軸帳」付箋「五ノ八」、一紙成巻
写経所(→造東大寺司)	11-69~71	ZZ28-12<1>裏	1	<080>	
写経所	3-280~311	ZB40裏	1	天平勝宝2「経師等上日帳」(3-426~458+10-371~374)	
写経所(→造東大寺司)	3-312~318	ZB21	1		四紙成巻、端裏「勝宝元年秋季布施文」(未収)
写経所(→造東大寺司)	11-71	ZZ42-1<18>	1		付箋「十四」「廿八□□」
写経所	11-72~80	ZZ10-25<1>~<12>	1		題籤軸「瑜伽論帳」(表裏同文)、右軸
写経所(→皇后宮職カ)	11-72	ZZ10-25<1>	1		
葛井根道→写経所	11-73	ZZ10-25<2>	1	封痕あり	

069		写経所経疏料紙出納帳	天平勝宝元	7	16	～天平勝宝3.4.13		料紙出納帳
070		雜物借用并返納帳	天平勝宝元	7	22	～天平勝宝4.8.25	千部法華經	借用・返納帳
071		大納言藤原家牒	天平勝宝元	8	8	作成		
072		丈部曾祢万呂解	天平勝宝元	8	8	作成		手実
073		経疏間校帳	天平勝宝元	8	13	～天平勝宝7.6.16	間写経	奉請文
074		請処々疏本帳	天平勝宝元	8	17	～同11・12	五月一日経	請本帳
	01	僧臨照書状	天平勝宝元	8	17	作成	大品経疏	奉請文
	01-01	請処々疏本帳	天平勝宝元	8	17	～同.11.22	解深密経疏・大乘義記・華嚴経疏	請本帳
	02	僧嚴智啓	天平勝宝元	11	12	作成	華嚴経疏	奉請文
075		検無書注文	未詳				先写	経巻検定文
076		経論疏等検定文案	天平勝宝元	8	19		間写経	経巻検定文
077		私願経等勘帳	未詳				間写経	勘帳
078		能登忍人解	天平勝宝元	8	28	作成		手実
079		久米家足解	天平勝宝元	8	29	作成		手実
080		常疏并間疏等用緒軸帳	天平勝宝元	8	30	～同9.9	五月一日経・間写経	用緒軸帳
081		東大寺写一切経所解案	天平勝宝元	8	末	作成	間写経	布施申請
082		経師等上日帳	天平勝宝元	8		～天平勝宝2.7		上日帳
083		東大寺写一切経所解案	天平勝宝元	9	1以降	作成	間写経	布施申請
084		写経所解案	天平勝宝元	9	1	作成	間写経	布施申請
085		瑜伽論帳	天平勝宝元	9	8	～天平勝宝3.7.11	瑜伽論	奉請の記録
	01	東大寺写経所啓案	天平勝宝元	9	8	作成	瑜伽論	奉請文
	02	奉請注文	天平勝宝元	9	8	作成	瑜伽論	(経巻の貢進を指示)

写経所(→皇后宮職力)	11-73	ZZ10-25<2>	1		余白に書込まれた文書案
僧綱政所→?	11-73~74	ZZ10-25<3>	1		
僧綱政所→?	11-74~75	ZZ10-25<4>	1		
造東大寺司→僧綱政所	11-75	ZZ10-25<5>	1		
僧綱政所→?	11-75~76	ZZ10-25<6>	1		
造東大寺司→僧綱政所	11-76~77	ZZ10-25<7>	1		
僧綱政所→?	11-77	ZZ10-25<8>	1		
写経所→造東大寺司	11-77~78	ZZ10-25<9>	1		
造東大寺司→僧綱政所	11-78	ZZ10-25<10>	1		
造東大寺司→僧綱政所	11-79	ZZ10-25<11>	1		書込あり
造東大寺司(→僧綱政所)	11-79~80	ZZ10-25<11>	1		余白に書込まれた文書案
造東大寺司→僧綱政所	11-80	ZZ10-25<12>	1		付箋「一ノ二」
僧綱→造東大寺司	3-512・563~564	Z42⑦	1		
造東大寺司(→永金大徳)	3-319~320	ZB6②	1		
写経所	11-81~83	ZZ25-2<21>~<26>	1・2	*注	付箋「進五□」「第廿七ノ第一」
写経所	24-603	ZK17<1>裏	2	天平20「更可請章疏等目録」(3-84~91)	
写経所	11-89~93	ZZ35-8<1>~<3>	1		三紙成巻、題籤軸「疏本充帳」
写経所	10-628	ZZ16-6<4>	1		
写経所(→綱索堂)	10-628	ZZ16-6<4>	1		
写経所(→宣教師所)	10-628	ZZ16-6<4>	1		
写経所(→宣教師所)	10-628	ZZ16-6<4>	1		
難万呂→写経所	10-628	ZZ16-6<3>	1	切封跡あり	
写経所(→造東大寺司)	11-83~84	ZZ2-5<1>	1		付箋「十一ノ五」「一」
写経所(→造東大寺司)	11-84~85	ZZ2-5<2>・<3>	2	「写経所解案」(11-85~86)	付箋「二」「廿八ノ十一」

巻」(未収)、26紙裏「校紙勘定注文」(11-83)

	02-01	東大寺写經所奏案	天平勝 宝元	9	8	作成	瑜伽論	奉請文
	03	奉請注文	天平勝 宝元	9	9	作成	瑜伽論	奉請文
	04	奉請注文	天平勝 宝元	11	11	作成	瑜伽論	奉請文
	05	造東大寺司牒	天平勝 宝2	2	20	作成	瑜伽論	奉請文
	06	奉請注文	天平勝 宝2	2	20	作成	瑜伽論	奉請文
	07	造東大寺司牒	天平勝 宝2	3	11	作成	瑜伽論	奉請文
	08	奉請注文	天平勝 宝2	3	12	作成	瑜伽論	奉請文
	09	写書所解	天平勝 宝2	2	28	作成	瑜伽論	請墨注文
	10	造東大寺司牒	天平勝 宝2	8	15	作成	瑜伽論	奉請文
	11	奉請注文	天平勝 宝2	8	15	作成	瑜伽論	奉請文
	11-01	造東大寺司牒案	天平勝 宝2	11	5	作成	瑜伽論	奉請文
	12	造東大寺司牒	天平勝 宝3	7	11	作成	瑜伽論	奉請文
	13	僧綱牒	天平勝 宝3	7	12	作成	瑜伽論	奉請文
086		造東大寺司牒案	天平勝 宝元	9	9	作成	解節經疏・解深密 經疏・成唯識論燈	奉請文
087		千部法華經校帳	天平勝 宝元	9	10	～?	千部法華經	校帳
088		写疏注文	天平感 宝元力	(9)	14	作成	大品經疏・涅槃經 疏・華嚴論疏	写疏注文
089		疏本充帳	天平勝 宝元	9	19	～同. 12. 9	大品經疏・涅槃經 義記・華嚴經疏	充本帳
090		經本出納帳	天平勝 宝元	9	20	～ 同. 11. 19	大般若經	經本出納帳
	01	奉請注文案	天平勝 宝元	9	20	作成	大般若經	奉請文
	02	奉請注文案	天平勝 宝元	11	16	作成	大般若經	奉請文
	03	奉請注文案	天平勝 宝元	11	19	作成	大般若經	奉請文
091		奉請注文	天平勝 宝元	9	21	作成	陀羅尼集經	奉請文
092		写經所解案	天平勝 宝元	(9)		作成	後写	用度勘定文
093		写經所解案	天平勝 宝元	9	11	作成	後写	用度勘定文

*) 21紙裏<101>、23紙裏「六六■二五六一」「一部上也」「一部上也」「封封封封封」(未収)、25紙裏「一■二七/六三

写経所	11-86~89	ZZ2-5<4>~ <6>	1		
写経所(→造東大寺司)	11-86~87	ZZ2-5<4>~ <6>	1		付箋「三」「卅一ノ廿」端裏「後勘一切用文」
写経所(→造東大寺司)	11-88~89	ZZ2-5<6>	1		
写経所	24-610~611	ZZ32-5<32>	2	「造紙注文」(天地逆) (24-611)	付箋「廿四」「第十七」
造東大寺司(→安宿宮)	24-606~607	ZZ16-4<21>	1		付箋「廿七ノ□」
写経所	11-94~95	ZZ4-2	1		一紙成巻、題籤「請大般若紙筆墨帳」、右軸
写経所(→内匠寮カ)	3-335	ZZ44-10<16>	1		付箋「了了」「一ノ十五」「十六」
阿刀酒主→写経所	11-95	ZZ35-7<5>	1		
装演所→写経所	11-96~101	ZZ2-2<9>~ <1>裏	2	天平15~19「一切経本充并納紙帳」(8-171~178)	
写経所	24-611	ZZ25-2<21>裏	1	<087>	「一部上也」は<087>にかかる記載か
常世馬人→写経所	24-588~589	ZZ27-4<56>	1	裏「□□万三千百張/□□四万三千二百冊五張余三」(未収)	付箋「卅二」「十三帙三巻」
写経所	24-584~585	ZZ47-3<22>	1		付箋「第十九號一張」
写経所	24-612	ZZ10-16<2>裏	1	天平20「百部最勝王経充本帳」(10-296~304)	大日古は勝宝元年に類収する。
写経所	24-612	S36②	2	天平19「廿部六十華嚴経充本帳」(24-426~431)	天平10「周防国正税帳」(2-139~144)の面に裏の帳簿に関する情報を書き込んだもの。
造東大寺司(→皇后宮職カ)	10-597~601	ZZ41-5<6>~ <8>	2	<参考3>	端裏「留経所案」付箋「一ノ三」
造東大寺司(→皇后宮職カ)	10-604~609	ZZ41-5<9>~ <13>	2	<039>・勝宝2「写経所牒案」(11-429)	
造東大寺司(→皇后宮職カ)	10-602~604	ZZ41-5<8>~ <6>裏	1	<参考1>	*注
写経所	3-221~222+ 10-284~287	ZZ15-4<1>~ <2>	1	2紙裏「疏目録」(天地逆)	
大安寺造仏所(→中務省カ)	3-237~238	ZZ29①	1	<061-01>	

付箋「出ノ十」、この文書、もと二断簡

094		後一切経用度勘定帳	天平勝宝元	9	11	～同. 12. 26	後写	用度勘定文
	01	写経所解案	天平勝宝元	9	11	作成	後写	用度勘定文
	02	爪工家万呂解案	天平勝宝元	9	11	作成	後写	用度勘定文
095		筆応請書生等歴名	(天平勝宝元)					
096		安宿宮請経文案	(天平勝宝元)	11	3	作成	華嚴修慈分・不増不減経	奉請文
097		請大般若紙筆墨帳	天平勝宝元	11	7	～天平勝宝2. 3. 13	大般若経	
098		牙占送文案	天平勝宝元	11	21	作成		
099		阿刀酒主用紙注文	天平勝宝元カ	12	7	作成	三部三千仏名経	用紙注文
100		装演受経紙継上等帳	天平勝宝元	12	10	～天平勝宝5. 2. 1	五月一日経・千部法華経など	用紙継上帳
101		充経師・校生筆墨注文	天平勝宝元カ					
102		写経用紙注文	未詳			作成		用紙注文
103		装演紙充帳	天平勝宝元カ	6	20	～同7. 5		紙充帳
104		経師写紙注文	(天平20)				(百部最勝王経)	
105		充経師筆墨注文	(天平19～20)					
参考1		造東寺司解案	天平勝宝3	2	8	作成	間写経	布施申請
参考2		造東寺司解案	天平勝宝3	2	7	作成	間写経	布施申請
参考3		造東寺司解案	天平勝宝2以降			作成	間写経	布施申請
参考4		経疏出納帳	天平18	5	20	～天平感宝元. 5. 27	間写経	経巻出納帳
参考5		大安寺造仏所解	天平感宝元	⑤	11	作成	大安寺華嚴	請丹注文

*) 9 紙に付箋「三」「出八巻」 10紙に付箋「勝宝三年二月八日又十二日／用紙千七百拾五張と続カ」 11紙に

〔参考文献〕

石上英一「集合文書と文書集合」(皆川完一編『古代中世史料科学研究上巻』吉川弘文館、一九九八年)

石上英一「正倉院文書目録編纂の成果と古代文書論再検討の視角」(石上ほか

編『古代文書論』東京大学出版会、一九九九年)

大平聡「写経事業と帳簿」(前掲『古代文書論』)

西洋子「正倉院文書整理過程の研究」(吉川弘文館、二〇〇二年)

野尻忠「正倉院文書写経機関関係文書編年目録―天平二十年―」(『東京大学

日本史学研究室紀要』六、二〇〇二年)

春名宏昭「先写一切経(再開後)について」(『正倉院文書研究』三、吉川弘文館、一九九五年)

皆川完一「光明皇后願経五月一日経の書写について」(坂本太郎博士還暦記念

会編『日本古代史論集上巻』吉川弘文館、一九六二年)

森明彦「大伴若宮連大淵と天平二十年寺華嚴経疏の書写(上)(下)」(『和歌

山市史研究』十四・十五、一九八六・八七年)

山口英男「正倉院文書の継文について」(前掲『古代文書論』)

山下有美「正倉院文書と写経所の研究」(吉川弘文館、一九九九年)

渡辺晃宏「天平感宝元(七四九)年大安寺における華嚴経書写について」

(『日本史研究』二七八、一九八五年)

〔付記〕本目録は、一九九七年に東京大学大学院人文社会系研究科における石上英一先生の演習において、新井と当時大学院生だった南部みどりが分担して報告した内容を新井の責任でまとめたものである。